

①追記内容

・・・FOGの重症度には相関が示されている⁴⁾。この現象に関して、内的リズムの形成能力が症状の軽減に有効であったとする報告⁵⁾があるものの、その現象学的な背景に関しては述べられていない。タッピングや定常歩行など・・・（P87）

参考文献

5) 村部義哉 他, 内的リズム形成課題により歩行継続時のすくみ足の改善を示した進行期パーキンソン病患者の1症例. 理学療法科学. Vol.29, p651~657, 2014

②所属先の変更

認知神経リハビリテーション結ノ歩訪問看護ステーション

→日本リハビリ訪問看護ステーション

所在地：〒520-0106 滋賀県大津市唐崎1-31-32 大川プラザ3号館2F

連絡先： 077-572-8228 (TEL) murabe0419@gmail.com (e-mail)

③表1の追加

表1. 本症例の介入初期段階（1～2週間）におけるプロフィール評価

Positive		Negative
・運動継続時間を内言語化することにより、運動の開始・終了、速度、継続時間、有無の認識が可能	どのように認識するか	・運動継続時間の内言語化が無い状態では運動覚の認識が困難
・運動継続時間の内言語化により、運動覚への注意の持続や選択が可能	どのように注意を使うか	・両足底での接触情報の時間・空間・強度的変化や体幹との位置関係など複数の身体部位や感覚モダリティへの注意の分配・転換が困難
・時間知覚を設定することで、最適な運動継続時間のイメージの想起が可能	どのようにイメージするか	・加速歩行を制御する際の運動イメージの想起が困難
・運動継続時間の内言語化が可能	どのように言語を使うか	・各身体部位や感覚モダリティの時間・空間・強度的関係性の言語化が困難 ・加速歩行出現時の意識経験の詳細な言語化が困難
・学習内容の意味・情動記憶化が可能であり、意識的な加速歩行の制御がやや可能	どのように学習するか	・学習内容の手続き記憶化が困難であり、無意識的な加速歩行の制御が困難 ・時間知覚とリアルタイムでの運動継続時間の比較が困難であり、最適な運動継続時間の即時的な判断が困難